

学生支援における大学生生活不安尺度の活用について

－エゴグラムとの関連－

下 平 明 美

Use of a Scale for College Life Anxiety in Student Support:
The Relationship With the Egogram Test

Akemi SHIMODAIRA

要旨：近年、大学生の中途退学、休学、不登校など修学上の問題に注目が集まっている。大学生生活不安尺度（CLAS）はそのような学生の大学不適応状況を早期発見したり未然に防ぐ可能性を考えて作成されたものである。その効果的な使用にあたり、現在学生相談場面でよく利用されている心理検査との関連を把握しておくことが大切だと考えた。今回は、女子大学生30名を対象に試行的にCLASとTEGⅡとの関連について調査した。その結果、ACと日常生活不安の関連、NPと日常生活不安および評価不安との関連、Aと評価不安の関係、大学生生活不安と自他に対する構えの関係などいくつかの興味深い視点が得られ、今後調査対象の数を増やして詳細な分析を行うことは、研究として有意義であると思われる。またCLASとTEGⅡの関連の一般的傾向をより詳しく把握することで、個別の理解も多角的になり、一層充実した学生支援につなげていくことができると考えられた。

キーワード：大学生生活不安尺度、エゴグラム、学生支援、心理検査

はじめに

近年、大学生の中途退学や休学に注目が集まっている。従来、小・中・高校生の問題とみられていた不登校も、「大学生の不登校」として一般的な認識となってきた。これら修学上の問題の背景には、経済的理由や進路模索などさまざまな要因が考えられるが、学生の適応やメンタルヘルス上の問題も大きな要因の一つと推測される。そこで大学には、不適応を感じる学生を早期に見出し、個別にきめ細やかな支援を行うことが一層求められてきている。心理的問題の早期発見を目的に作成された大学生向けの質問紙としては全国大学保健管理研究集会によって開発されたUPI（University Personality Inventory）が普及している（平山・全国大学メンタルヘルス研究会、2011）が、この質問紙は、神経症や心身症などの精神症状を中心とした治療の必要性をチェックするという側面が強い。藤井（1998）は、大学生の不適応状態の背景には未熟さと同時に必ず“不安”が存在していると指摘し、学生の日常生活における不安水準を詳細に分析できれば、大学不適応を早期発見、支援したり、予防したりすることが可能になると考えた。しかし、現在広く用いられている既存の不安検査（例えばMAS、STAIなど）は、一般的な不安の測定を

目的として開発された尺度であるため、大学生生活場面において生じる不安に限定して測定することが難しい。そこで、大学生が学生生活において感じている不安の種類及び水準を適切かつ迅速に診断できる心理検査として大学生生活不安尺度を開発した（藤井，1998）。この検査がCLAS（College Life Anxiety Scale：大学生生活不安尺度）として2013年に市販され始めた。この検査の有用性が認められ、近年の大学の状況からこのような検査の必要性が高まってきたことがその背景にあると推測される。

1. 大学生生活不安尺度（CLAS）の活用について

藤井（2013）によると、大学生生活不安尺度（以下CLASと表記）は、学生生活の不安を測定する30項目に「はい」「いいえ」の2件法で回答するものであり、実施所要時間も10分程度と短く、採点も容易である。結果は、全体の合計得点だけでなく、3つの下位尺度の得点も合わせて、多面的に理解していく。3つの下位尺度は、①日常生活不安（Daily Life anxiety）-D尺度（13項目）：「大学で人が自分のことをどう思っているか、気になります」「4年間で卒業できるかどうか、不安です」など大学の日常生活に対する不安感、②評価不安（Evaluation anxiety）-E尺度（11項目）：「授業中に何かをしなければならないとき、へまをするのではないかと不安になることがあります」「必修科目の成績が不可だったらどうしようと心配になることがあります」など大学における単位や試験を含め、他人からの評価に対する不安感、③大学不適応（College maladjustment）-C尺度（5項目）：「こんな大学にいたら自分がだめになるのではないかと憂鬱な気分になることがあります」「この大学にいて、何か不安な気持ちになります」など「不登校」や「中退」といった修学上の問題を生じさせるような大学に対する違和感・不適応感である。さらに各尺度の得点の高低の組み合わせで9個のタイプ判定を行うことが可能である。

主な活用場面としては、大学で全新生や全学生に実施し、スクリーニングとして利用したり、学年ごとの各学生の心の変化を的確にとらえることで大学不適応の未然防止につなげることで、心理学などの講義の受講生に対して実施し、自己採点させることで学生に自分の適応状況を考えるきっかけにすることなどが考えられている。また、学生相談場面においては、導入時や相談利用による変化の測定に利用することが考えられる。さらに藤井（2013）は、CLASは単独でも大学不適応の状態について多面的にみることができるが、他の心理検査と併用することにより、一層大学不適応の原因及び支援の在り方が明確になると述べている。CLASは開発段階において妥当性を検討するために、日本版CMI健康調査票、一般的な不安を測定する日本版MAS、テスト不安を測定する青年版TAIとの関連が調査されており、その結果、日本版CMI健康調査票に示される神経症傾向が強いほどCLAS得点が高いこと、日本版MASは日常不安尺度（D）と、青年版TAIは評価不安尺度（E）と相関が高いことが見出されている（藤井，1998）。そこで今回は、それ以外の心理検査とCLASとの関連について調べた先行研究について概観した。大学生生活不安尺度がCLASとして市販されるようになってからCLASを用いた研究報告はまだほとんど見られないようであるが、それ以前に大学生生活不安尺度（藤井，1998）を用いて行われた研究としては、以下のような報告が見られた。なお大学生生活不安尺度を使用している、上述の3つの下位尺度を利用せず、自らの分析方法によって抽出された因子を用いた研究や評定方法を改変して用いた研究については除外した。

2. 大学生生活不安尺度 (CLAS) と他の心理検査との関連を調べた先行研究

①自己愛人格目録短縮版 (NPI-S) (小塩, 1998,1999) : 自己愛傾向を測定する尺度で, 「優越感・有能感」「注目・賞賛欲求」「自己主張性」の下位尺度で構成されている。

小塩 (2004) が, NPI-Sで測定した自己愛傾向と大学生生活不安との関連を検討した結果, 「優越感・有能感」, 「自己主張性」が高い者ほど大学生生活不安が低い傾向にあり, 「注目・賞賛欲求」と大学生生活不安は正の関連を示す傾向があることが示唆された。大学生生活不安の下位尺度に注目すると, 自己愛全体が低く, 「注目・賞賛欲求」が優位な者ほど日常生活不安 (D) が高い傾向にあり, 自己愛全体の高低に関わらず「注目・賞賛欲求」が優位な者ほど評価不安 (E) を感じる傾向にあることが示された。

②達成動機測定尺度 (堀野, 1987), KiSS-18 (Kikuchi's Social Skill Scale : 18項目版) (菊池, 1988) : 達成動機測定尺度は, 「自己充實的達成動機」と「競争的達成動機」の下位尺度から構成され, 達成動機の高さを測定する。KiSS-18は, 対人関係を円滑に運ぶために役立つスキルである「社会的スキル」の程度を測定するものである。

川上 (2004) による女子大学への新入生を対象とした調査では, 大学生生活不安の高さと競争的達成動機の高さが関連すること, 社会的スキルの低さが大学生生活不安の高さに関連することが示唆された。達成動機の高さは, やる気として不安を低下させる効果よりも大学生生活を競争場面と捉えて競争に対する不安をより強く感じることに影響していると考えられた。さらに川上 (2006) は, 女子大学への新入生を3年度にわたって調査した結果, 大学生生活不安と達成動機, 社会的スキルとの関係は比較的安定していたと述べている。大学生生活不安の下位尺度についてみると, 日常生活不安 (D) と評価不安 (E) との間には, 一貫して高い相関が認められている一方, 大学不適応 (C) と日常生活不安 (D) および評価不安 (E) との間は相関は年度によって認められたり認められなかったりしていた。このことから川上 (2006) は, 大学不適応 (C) を高く示す学生の特徴が必ずしも一貫していないものと推測した。また, 社会的スキルは, 日常生活不安 (D) および評価不安 (E) と一貫して高い負の相関を示した。

③意欲減退度診断検査 (山田, 2006) : 広島大学保健管理センター (1973, 未刊行) が作成したものを山田 (2006) が一部改編したものであり, 大学生の不応傾向を主として意欲減退 (スチューデントアパシー) の視点からとらえようとするものである。

山田 (2006) は大学新入生を対象に入学間もない時期に意欲減退傾向と大学生生活不安傾向を調査し, その後の適応・修学状況の動向 (2年前期終了までの休学・退学状況) を検討した。大学生生活不安については, 大学不適応に関する不安 (C) が不適応行動出現の指標となることが示唆されたが, 極端な不安の低さも意欲低下などの点で問題になる可能性があるとして推測された。日常生活不安 (D) や評価不安 (E) については退学・休学との明確な関連を指摘することはできなかった。

④日常生活スキル尺度 (大学生版) (島本・石井, 2006), 社会的自己制御尺度 (原田・吉沢・吉田, 2008) : 日常生活スキル尺度 (大学生版) は, 対人スキルである「親和性」「リーダーシップ」「感受性」「対人マナー」と個人的なスキルである「計画性」「情報要約力」「自尊心」「前向

きな思考」の8つの下位尺度から構成されている。社会的自己制御尺度は、青年期を対象として社会的自己制御（SSR；Social Self-Regulation）を測定する尺度で、自己主張の側面である「自己主張」と自己抑制的側面である「持続的対処・根気」「感情・欲求抑制」の3つの下位尺度から構成されている。

中井・菅（2012）は、大学生活において不適応に陥る学生は日常生活スキル・社会的スキルのどの部分に弱みを持つかについて、生きがい感（生きがい感スケール（近藤・蒲田，1998）によって測定）・大学生活不安との関連を検討した。大学生活不安に関しては、大学不適応（C）を除く下位尺度（D,E）と「日常生活スキル尺度」との負の相関が多く認められた。特に計画性以外の個人スキルが強く関わっていることが示唆された。また「社会的自己制御尺度」については、「自己主張」「感情・欲求抑制」と負の相関が見られた。

⑤Multidimensional Sense of Humor Scale（ユーモアの有無尺度）（Thorson and Powell, 1993）、ユーモア態度尺度（宮戸・上野，1996）：ユーモアの有無尺度は「ユーモアの表出」、ユーモアのコーピング利用」「ユーモアの受容」「ユーモアへの態度」の下位因子から構成されている。ユーモア態度尺度はユーモアに対する好みや反応性を測定する尺度である。

野中・山田（2013）は、先行研究よりストレスの緩和や精神的健康を保つためにユーモアが効果的であることから、ユーモアを知覚したり使用したりすることで大学生活不安を和らげることができる可能性を考え、大学生活不安とユーモアの有無およびユーモア態度との関連を研究した。その結果、ユーモアを使用する人を肯定的にとらえること、さらにはユーモアのコーピング利用（ユーモアを困難な状況やストレスの対処に用いること）が大学生活不安を和らげるために効果がある可能性が見いだされた。

これらの研究から、大学生活不安は社会的スキル・生活スキルや自己主張、ユーモアのコーピング使用などと負の関連があり、注目・賞賛欲求や競争達成動機とは正の関連があるという傾向が示唆された。下位尺度を見てみると、日常生活不安（D）や評価不安（E）は上述のような傾向を持つが、大学不適応（C）にはこれらの関連があまり見られなかった。CLASの中でも日常生活不安（D）や評価不安（E）と大学不適応（C）とでは性質が違っているものと思われる。藤井（2013）も大学不適応（C）は既存の不安尺度との相関が高くなく、既存の不安検査では測定できない「大学生活における不適応傾向」を調べることができるのではないかと述べている。上述した山田（2006）の結果もこれを裏付けるものであろう。

ただ、これらの研究内容は非常に興味深いものの、用いられている検査・尺度はいずれも学生相談領域などで一般的に用いられている検査とは言い難い。例えば、最近の日本の臨床場面において用いられている心理テストの現況をまとめた名島（2010）は、大学生年齢を対象に含むパーソナリティ関係の心理テストを39種類あげているが、その中に上述の心理検査は含まれていない。そこで、現在よく用いられている心理検査であり、本学の学生相談室においても使用頻度の高い心理検査についてCLASとの関連を把握しておくことが、今後の効果的な利用につながると考えた。該当する心理検査はいくつかあるが、その中で今回は東京大学医学部心療内科TEG研究会によって開発、改訂されてきた新版東大式エゴグラムⅡ（以下TEGⅡと表記）（東京大学医学部心療内科TEG研究会，2006a）について取り上げた。

3. 新版東大式エゴグラムⅡ (TEGⅡ) について

エゴグラムは、アメリカの精神科医Eric Berne (1964) が提唱した交流分析理論をもとに、Dusay, J.M. (1977) が自我の状態をより定量的・構造的にとらえる方法として考案したものである。交流分析理論では、自我状態(思考, 感情, 行動パターンを包括したもの)を「P (Parent): 親」「A (Adult): 成人」「C (Child): 子ども」の3つに分類し、さらにPには「CP (Critical Parent): 批判的親」と「NP (Nurturing Parent): 養育的親」、Cには「FC (Free Child): 自由な子ども」と「AC (Adapted Child): 順応した子ども」のそれぞれ2側面があるとして、5つの自我状態を考えている。Dusay, J.M. (1977) が各自我状態を自分がどの程度使うかを5本の棒グラフとして相対的な高さで書かせたのが最初のエゴグラムである。このようにエゴグラムは当初直感的にグラフ上に示すものであったが、のちに質問紙による回答を集計して表現する方法が考案され、質問紙法エゴグラムが開発された。TEGⅡはその代表的なものの1つであり、医療、教育、企業などの多くの場面で活用されている。TEGⅡは質問項目が53個で所要時間が10～15分程度と短いことに加え、エゴグラムの結果は、5本の棒グラフという見た目にはわかりやすい形で表現され詳しい知識がなくても比較的容易に理解できること、自分の性格や行動特性とともに他者とのコミュニケーションについても考えやすい切り口であることが広く用いられる要因であると考えられる。本学の学生相談室においても、自己理解を求めて心理テストを希望してきた学生に対して実施したり、相談利用中の学生への一助とする場合などTEGⅡを使用する機会は多い。

エゴグラムの見方としては、プロフィールを作成した後、まず一番高い自我状態に注目し、優位な自我状態と低い自我状態の性質も併せて検討し、総合的な判断を行う。TEGⅡでは、それを19のパターンに分類している(東京大学医学部心療内科TEG研究会, 2006b)。また、交流分析の基本的な理論の1つに「基本的構え (life positions)」がある。これは自己概念と他者概念に関する理論で、人は、「自己を肯定的 (OK) にとらえているか、否定的 (not OK) にとらえている」「他者を肯定的 (OK) にとらえているか、否定的 (not OK) にとらえている」と考え、自己および他者のとらえ方がそれぞれOKかnot OKかで4つの「基本的構え」のタイプが存在する。この4つの類型は、“I’m OK – I’m Not OK”軸と“You’re OK – You’re Not OK”軸という2軸が交差してできる4象限 (OKグラムあるいはOK牧場とも呼ばれる (杉田, 2000)) として表現される。東京大学医学部心療内科TEG研究会 (2009) によると、過去の研究から、FCが自己肯定的傾向 (I’m OK) と関連があり、NPが他者肯定的傾向 (You’re OK) と関連があり、ACが自己否定的傾向 (I’m Not OK) と関連があり、CPが自己肯定的傾向および他者否定的傾向 (I’m OK, but You’re Not OK) と関連があることが報告されており、「基本的構え」を検討するツールとしても使用可能である。そこで“I’m OK – I’m Not OK”はそれぞれ“FC – AC”に、“You’re OK – You’re Not OK”は“NP – CP”に対応すると考え、これを1つの図に表したものが図1である。ただしOKグラムを測定する検査として適性科学研究センターが開発したTAOKの結果は、エゴグラムと必ずしも一致するものではないことが指摘されている (杉田, 2000)。FCとAC、NPとCPの得点の差に基づいて、 $FC \geq AC$ (自己肯定)、 $FC < AC$ (自己否定) および $NP \geq CP$ (他者肯定)、 $NP < CP$ (他者否定) として、「基本的構え」の4つのタイプに分類するというのはやや大雑把ではあるが、今回はOKグラムそのものではなく、CLASとTEGⅡの関連について考察するのが目的であり、図1のような枠組みを考えた。

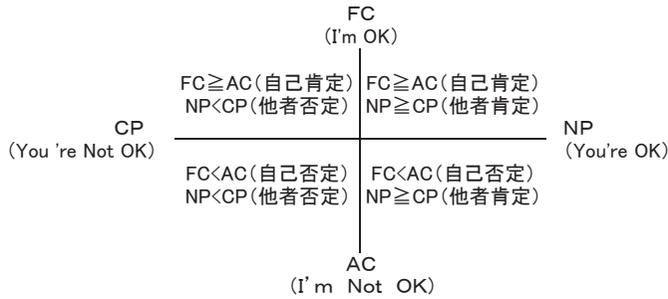


図1 基本的構えの4類型（三野，2009を参考に改編）

4. CLASとTEG IIを用いた調査の結果と考察

今回、試行的に30名の女子大学3年生を対象にCLASとTEG IIを実施した。まずCLASの平均プロフィールを図2に示した。さらにCLASのタイプ判定を行ったところ、表1のような結果が得られた。上述したようにタイプ判定は、各尺度の得点の高低（Z得点55以上を高いとする。高低は各尺度を表すアルファベットの太文字，小文字で表現する）の組み合わせで行われる。日常生活不安（D），評価不安（E），大学不適應（C），全体得点のいずれも55点未満の場合は、「大学生活充実型（以下充実型と表記）」と判定される。

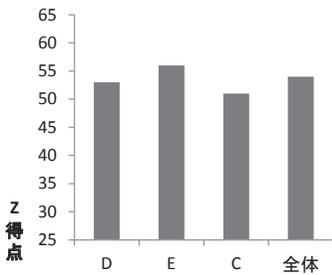


図2 CLASの平均プロフィール

表1 CLASのタイプ別人数

CLASのタイプ	人数
DEC型	1
dEC型	1
DeC型	1
deC型	2
DEc型	5
Dec型	5
dEc型	6
dec型	1
充実型	8
計	30

次にTEG IIについて、全体平均とCLASのタイプ別の平均プロフィールを図3に示した。取り上げたCLASのタイプは、該当者が5名以上であったDEc型，Dec型，dEc型，充実型の4タイプ，それに加えて，大学不適應（C）が高い型4つ（DEC型，dEC型，DeC型，deC型）をまとめると5名であったのでこれを大学不適應（C）型とし，合計5つのタイプを取り上げた。TEG IIは標準化したスケールを用いており，一般健常者の中での位置を一目で把握することができる。今回の対象者の平均は，成人女性の平均に近く，いずれの自我状態も中程度（パーセンタイル値が25～75%未満）とされる範囲内ではあるが，平均よりもややCPが低く，ACが高かった。

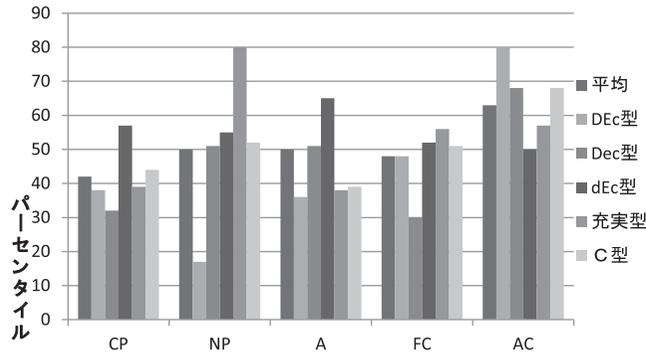


図3 CLASのタイプ別TEG IIプロフィール

今回は対象者数が少ないので、タイプ別の比較を統計的に行うことは難しい。そこで、全体的なCLASとTEG IIの相関関係を求めた結果（表2）と合わせて考察する。

表2 CLASとTEG IIの相関

	CP	NP	A	FC	AC
D	-0.07	-0.46**	0.08	-0.21	0.53**
E	0.03	-0.36*	0.10	-0.18	0.29
C	-0.08	-0.12	-0.16	-0.16	0.11
CLAS全体	-0.05	-0.48**	0.06	-0.26	0.47**

**p<.01, *p<.05

TEG IIの各自我状態について見てみると、CLASとの有意な相関が見られたのはACとNPのみであった。また大学不適応（C）はすべての自我状態と相関が低かった。

まずACについては日常生活不安（D）およびCLAS全体と正の相関が見られた（表2）。図3を見ても、ACが最も高いのがDEc型で、最も低いのがdEc型であり、その違いは日常生活不安（D）の高さの違いであった。もともと学生相談場面で相談利用中の学生にTEG IIを実施した際、ACが満点となるものも珍しくなく、学生に見られるACの高さは気になる場所であった。エゴグラム研究の盛んな心身医学領域でも多くの研究者が心身症患者は健常者に比べてACが高いことを指摘している（杉田, 2000）。今回の結果からは、ACの高さは日常生活不安（D）と関連している可能性が考えられた。

また、ACよりも大きな差が見られたのがNPである。NPは日常生活不安（D）、評価不安（E）、CLAS全体と負の相関が見られた（表2）が、CLASのタイプ別に見ると（図3）、NPが高いのは充実型で、低いのがDEc型、他の4つのタイプはほぼ平均という結果であった。日常不安（D）、評価不安（E）を併せ持つこととNPの低さに特別な関連があるのかどうかについては今後検討していきたい。

これまで学生相談場面でTEG IIを利用した際、不適応感を抱く多くの学生にAの低さが見られるのも気になる場所であった。しかし今回AはCLASの各尺度と相関が低く（表2）、充実型でAが高いという傾向も見られなかった（図3）。個別のデータを見ると、Aの得点が1、2点と最も低かったのは充実型の者であったのは興味深い。またAが最も高かったのはdEc型であった

(図3)。dEc型は評価不安(E)のみ高いタイプであり、Aに見られる論理的、客観的で、ある意味計算高い面が大学生活における成績、評価への不安と結びつきやすい可能性が考えられる。これは、先述した川上(2004)の達成動機の高さは大学生活を競争場面と捉えて競争に対する不安をより強く感じることに影響している、という示唆と関連しているかもしれない。評価不安(E)がACの高さと関連するような一般的な評価への不安よりも特に大学生活における評価、成績への不安を焦点的にとらえていることの流れとも考えられる。このことについても今後詳しく検討したい。

続いて30名のTEG IIの基本的構えを調べ、各類型に該当する人数を図4にまとめた。さらにCLASのタイプ別にTEG IIの基本的構えの類型を示したものが表3である。

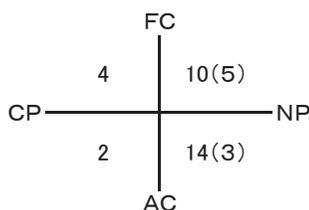


図4 「基本的構え」の類型別人数
* () 内は充実型的人数

表3 CLASのタイプ別に見た「基本的構え」の類型

CLASのタイプ	FC \geq AC NP \geq CP	FC \geq AC NP<CP	FC<AC NP \geq CP	FC<AC NP<CP	計
DEC型			1		1
dEC型			1		1
DeC型				1	1
deC型	1		1		2
DEc型		2	3		5
Dec型	2		2	1	5
dEc型	2	1	3		6
dec型		1			1
充実型	5		3		8
計	10	4	14	2	30

* FC \geq AC(自己肯定)、FC<AC(自己否定)
NP \geq CP(他者肯定)、NP<CP(他者否定)

全体的に見て最も特徴的なのはNP \geq CP(他者肯定)が30名中24名と非常に多かったことである。特に充実型は全員がNP \geq CP(他者肯定)であった。これに関連した先行研究として、大学生を対象にOKグラムによって類型化される基本的構えの違いが精神的健康(改訂いきいき尺度(田中ら, 2003)を用いて測定)とどのように関連するかを調べた三野(2009)は、基本的構えが自己肯定型の者と自己肯定・他者否定型の者は、自己否定・他者肯定型や自己否定型の者よりも精神的健康度は高く精神的ストレス反応度は低いという結果を得ている。三野(2009)はこの違いは自己肯定と自己否定との違いであり、他者肯定と他者否定には明確な差が見られなかったことから、大学生の精神的健康度は他者に対する構えよりも自己に対する構えによって規定される、と述べている。今回の結果では、大学生活不安の低い充実型でNP \geq CP(他者肯定)の者が多く、大学生活不安と他者に対する構えに関連性がある可能性が考えられる。ただし充実型ではFC \geq AC(自己肯定)である第1象限(自他肯定)の者が5名、FC<AC(自己否定)である第3象限(自己否定・他者肯定)の者が3名であったのに対し、充実型以外では、NP \geq CP(他者肯定)の中でも第1象限(自他肯定)の者が5名、第3象限(自己否定・他者肯定)の者が11名と逆転が見られた。先述したように、CLASの全体得点はNPだけでなくACとの相関も見られており(表2)、充実型とそれ以外の型には自己に対する構えの違いも影響しているかもしれない。また、東京大学医学部心療内科TEG研究会(2006b)によると、TEG IIの各尺度の平均は、CP=12.24、NP=14.25、A=10.85、FC=13.26、AC=11.72であり、基本的にNP>CP、FC>ACが平均となる。今回の調査ではこれ以上の考察が難しいが、今後はこういった要素も加えた上で、より詳細に検討していく必要があると思われる。

お わ り に

ここまでCLAS とTEGⅡとの関連について、いくつかの観点から検討を行ってきた。今回は調査対象の人数が少ないため十分な統計的分析を行うことは難しかったが、CLAS とTEGⅡとの関連について、いくつかの興味深い視点を得ることができた。今回の試行的な調査の結果から、今後調査対象の数を増やして詳細な分析を行うことは、研究として有意義であると思われる。

また、今回CLAS とTEGⅡとの関連を考察する中で、学生支援においては一般的な傾向を把握するだけでなく個別に考えることも重要であると再確認した。CLASの中でも大学不適應尺度(C)は他の心理検査・尺度との関連があまり認められず、独自の性質を持つと考えられた。先述した川上(2006)も大学不適應(C)を高く示す学生の特性は必ずしも一貫していないと指摘したが、今回の結果を見ても、大学不適應(C)の高いタイプの1つであるdeC型に該当した2名のTEGⅡの特徴は大きく異なった。両者ともNP \geq CP(他者肯定)だが、一方はFC \geq AC(自己肯定)でFCが満点であり、プロフィールはFC優位型であった。大学の日常生活や評価への不安はないが、自分の思い通りにしたい気持ち(FC)から現在の大学への不満につながっている可能性が考えられる。もう一方はFC $<$ AC(自己否定)で、プロフィールはNPとACの高いN型であり、「No」と言えず人に尽くす傾向から生じる負担感が大学生活や評価でなく大学そのものへの不満に向けられている可能性も考えられる。このように個別の背景を考えて学生支援につなげる際にも、今回使用したCLASとTEGⅡのテストバッテリーは有用であるように思われた。さらにCLASとTEGⅡの関連に見られる一般的傾向をより詳しく把握することで、こういった理解も多角的なものになり、一層充実した学生支援につなげていくことができると考えられる。

引 用 文 献

- Berne,E. (1964). *Games People Play*. Grove Press. 南博訳(2000). *人生ゲーム入門(新装版)*. 河出書房
- Dusay,J.M. (1977). *EGOGRAMS: How I See You and You See Me*. Harper & Row Publishers. 池見西次郎監修, 新里里春訳(1980). *エゴグラム*. 創元社
- 藤井義久(1998). 大学生生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討. *心理学研究*, 68, 441-448.
- 藤井義久(2013). *CLASマニュアル*. 金子書房
- 原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和(2008). 社会的自己制御(Social Self-Regulation)尺度の作成—妥当性の検討および行動抑制/行動接近システム・実行注意制御との関連. *パーソナリティ研究*, 17, 82-94.
- 平山皓・全国大学メンタルヘルス研究会(2011). *UPI利用の手引き*. 創造出版
- 堀野緑(1987). 達成動機の構成因子分析—達成動機概念の再検討. *教育心理学研究*, 35, 148-154.
- 川上正浩(2004). 大学生活に対する不安について(1). *日本教育心理学会総会発表論文集*, 46, 158.
- 川上正浩(2006). 女子大学新入生の大学生活における不安について:3年度分データの比較検討. *大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要*, 5, 71-78.
- 菊池章夫(1988). *思いやりを科学する*. 川島書店
- 近藤勉・鎌田次郎(1998). 現代大学生の生きがい感とスケール作成. *健康心理学研究*, 11, 73-82.
- 三野節子・金光義弘(2009). 大学生の対人関係の基本的構えと精神的健康との関係—交流分析におけるエゴグラムの類型化を通して—. *川崎医療福祉学会誌*, 18, 481-484.
- 宮戸美樹・上野行良(1996). ユーモアの支援的効果の検討—支援的ユーモア志向尺度の構成—. *心理学研究*, 67, 270-277.
- 名島潤慈(2010). 臨床場面において用いられている心理テストの現況. *山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要*, 30, 101-112.

- 中井寿栄・菅千索 (2012). 日常生活スキルと社会的スキルが大学生生活に与える影響について. 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, **22**, 63-70.
- 野中優実・山田浩平 (2013). 大学生のユーモアと大学生活不安との関連. 愛知教育大学保健環境センター紀要, **12**, 45-52.
- 小塩真司 (1998). 自己愛傾向に関する一研究 - 性役割感との関連 -. 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), **45**, 45-53.
- 小塩真司 (1999). 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連. 性格心理学研究, **8**, 1-11.
- 小塩真司 (2004). 自己愛傾向と大学生活不安の関連. 人文学部研究論集, **12**, 67-78.
- 島本好平・石井源信 (2006). 大学生における日常生活スキル尺度の開発. 教育心理学研究, **54**, 211-221.
- 杉田峰康 (2000). 医師・ナースのための臨床交流分析 第2版. 医歯薬出版
- 田中芳幸・津田彰・小笠原正志・大島晶子・神宮玲子 (2003). 改訂いきいき度尺度の作成 - 信頼性と妥当性の検討. 日本健康心理学会大会発表論文集, **16**, 172-173.
- Thorson, J.A. and Powell, F.C. (1993). Development and validation of a multidimensional sense of humor scale. *Journal of Clinical Psychology*, **49**, 13-23.
- 東京大学医学部心療内科TEG研究会 (2006a). 新版TEG II 実施マニュアル. 金子書房
- 東京大学医学部心療内科TEG研究会 (2006b). 新版TEG II 解説とエゴグラム・パターン. 金子書房
- 東京大学医学部心療内科TEG研究会 (2009). 新版TEG II 活用事例集. 金子書房
- 山田ゆかり (2006). 大学新入生における適応感の検討. 名古屋文理大学紀要, **6**, 29-36.

[2014. 9. 25 受理]